

フィーメール

2005(平成17)年4月6日鑑賞(東映試写室)



『桃』原作＝姫野カオルコ／監督＝篠原哲雄／出演＝長谷川京子／野村恵里／池内博之 『太陽の見える場所まで』原作＝室井佑月／監督＝廣木隆一／出演＝大塚ちひろ／石井苗子／片桐はいり 『夜の舌先』原作＝唯川恵／監督＝松尾スズキ／高岡早紀／近藤公園 『女神のかかと』原作＝乃南アサ／監督＝西川美和／出演＝大塚寧々／森田直幸 『玉虫』原作／小池真理子／監督＝塚本晋也／出演＝石田えり／小林薫／加瀬亮 (東芝エンタテインメント配給／2005年日本映画／118分)

……5人の人気女流作家が書き下ろした原作を異なる監督が異なる俳優陣でオムニバス風に構成した風変わりな映画。そのテーマはタイトルどおり、「フィーメール」すなわち「女」であり、エロス。しかし、その出来は……？ 作家も監督も俳優も一流どころ(?)を集めているものの、はっきり言って退屈。こんな安易な企画では、韓流にやられてしまうのでは……？

第5章

こんな安易な企画はダメ！

この映画は、5人の女流作家に映画化を前提として原作の書き下ろしを依頼し、その原作を5人の異なる監督が異なる俳優陣を起用して映画化したもの。つまり、女流作家5人の異なる目から描く女性＋エロスという企画。パンフレットによればこの企画は、『小説新潮』編集長である江木裕計氏がコーディネートしたとのこと。しかし、その出来は？ はっきり言って全然ダメ！ この5つの異なる物語を順次登場させたオムニバス映画は、退屈そのもの！ こんな安易な企画の日本映画をつくっていたのではますます韓流ブームにやられてしまうのでは……？

小説にも、新聞や週刊誌の連載小説から満を持した大作までいろいろあるが、いわゆる「読みきり小説」というものがある。これは小説をメインとした月刊誌に載せられているもの。これらは読者の目をひくため、しばしば「官能〇〇小説」とか「エロティック△△の競演」とかの宣伝文句で売られており、私も新幹線の中でビール片手の暇つぶしに読む読みものとして、過去によく買ったことが

ある。このようにこれらの読みきり小説は、その時のちょっとした暇つぶしとして読むレベルのものが多く、感動作などという作品にはまずお目にかかれないもの……。要するに、おおむねエッチ系の何か面白いテーマで読者の興味をひくだけの、ちょっとしたストーリーにすぎないものが多いわけだ……。もっともこの映画は、そんな安易なレベルの小説を原作にしたわけではないはずだが……？

5つの物語を、くだらない順(?)に並べて簡単に評論すれば次のとおりだ。

第1位 『太陽の見える場所まで』

この物語は、銀座のホステス、マチコ(石井苗子)が仕事がハネてタクシーに乗ったところ、助手席に隠れていた若い女日出美(大塚ちひろ)が顔を出して「こんばんは、ゴートーです」と包丁を突き出したところから始まる。タクシーの運転手も女だったが、この佳代(片桐はいり)は既に2万円の被害にあった。こんな3人の女がタクシーの中でくり広げるバカバカしい議論(おしゃべり)とバカバカしい出来事を描いたのがこの映画。原作の室井佑月氏が、銀座のクラブでホステスをしていた経験をベースに発想した物語だろうが、実にくだらない映画。バカ女3人(?)のかしましぶりや夢の中で黛ジュンの『天使の誘惑』を3人が歌い踊るシーンを延々と観ていると、もううんざり……!

第2位 『女神のかかと』

これは大塚寧々の主演だが、ちょっと問題ありでは……? つまり、森島梗子(大塚寧々)の小学生の娘、奈月(藤原希)に勉強を教えている同じ小学生の水沼真吾(森田直幸)は、自分の母親とは全く異なる梗子の女としての魅力?に目覚めてしまった。その最初は、奈月の家を訪れた真吾を迎えてくれた時に見た梗子の形のいい足や二の腕の白さ。そしてこんな真吾の視線に気づいた梗子は……? こんな映画を観ていると、女流作家の視点のイヤらしさに思わずゾッ……。しかしこれって、小学生の男の子に対する逆セクハラでは……?

第3位 『夜の舌先』

これは、先日保坂尚輝と離婚したばかりの高岡早紀が主演する物語で、かなり

セクシー度（エッチ度？）が高いものと週刊誌で報じられていた映画。パンフレットにも原作者の唯川恵氏の発言として「初めてエロティックなシーンをふんだんに盛り込みました。いやらしくも、いじらしい女性を書いたつもりです」とある。しかし、そのストーリーづくりの安易さといい、ムリヤリ笑いを誘おうとするようなセリフといい、スクリーン上で展開される男女の絡みシーンといい、こりゃHビデオの一步手前……？ それならわざわざスクリーンで観なくても、片手間で十分……？

第4位 『玉虫』

これは、原作者小池真理子氏特有の（？）ちょっと非日常な世界における、じじい（小林薫）とその愛人の女（石田えり）そしてその一軒家を訪れてきた若い男（加瀬亮）の奇妙な関係を描くもの。塚本晋也監督の『六月の蛇』（02年）は黒沢あすか主演のすばらしい映画だった（『シネマルーム3』359頁参照）。そしてこの物語にも、それと似たようなフィーリングはあるものの、基本的にはストーリーが安易すぎ。その上、あのピンク・レディーの『渚のシンドバッド』を振り付きで踊るシーンが2度も登場すると、もううんざり。せつかくこれだけのスタッフをそろえたのだから、もう少し真剣な映画づくりをしてほしいものだが……？

第5位 『桃』

これも、タイトルの『桃』を象徴的に使ったエッチな映画。しかし月刊誌でよく見るこの手の安易なエッチ小説をそのまま映画にしても、所詮いい映画はできないのでは……？ ただ、恩師の葬儀のために故郷に戻った東京暮らしのOL森岡淳子（長谷川京子）とその14歳の少女時代を演じる野村恵里は、結構自然でいい演技をしているだけこの映画はまし……？ 地元の同級生の男矢崎（池内博之）は単なる添えものだが、中学生の淳子が見せる体あたりのセックスシーンはそれなりのもの。しかし、わざわざ映画館でそんなセックスシーンを観なくても……。映画づくりにおいては、こんな安易でエッチビデオの延長のようなものではなく、心に感動を与える作品を目指してほしいものだが……。

2005(平成17)年4月7日記